

湖底に眠るふるさと

—鎮魂のまちづくり—

山岡 榮 市

は じ め に

わたしが初めて大和の農村に入ったのは昭和52年(1977)秋のことであった。調査の主なテーマは次の2つであった。1つは、大都市に近接したこの地方における地主層の性格、それに関連して現時点における同族団の存在形態とその機能。いま1つは、全国有数の溜池用水依存率をもつ大和農村のムラ共同体の規制。古い歴史をもつ大和の農村では以上の2つが典型的に残存機能していると予想したのであるが、踏査の結果は完全に予想を裏切るものであった。すなわち同族団の存在や機能はわたしがこれまでに調査してきた山陰地方の農山村や、昭和47年京都に転じて以来若干の踏査を試みた丹波・近江の諸村に比べても著しく希薄化しており、とくに灌漑用水についてはその規制が著しく弱められているのであった。わたしはかつて(昭和15年～20年)奈良市に在勤したことがあるが、戦時体制下食糧増産の叫ばれていた当時、大和平野の農民達が炎天下で稲株の側に穴を掘り注水していた光景を、一再ならず車窓から眺めたことがある¹⁾。そのことをこの度踏査した葛城地方の農民に話すと、「今はそんな心配は全くなかった」と答えるのであった。よく聞けば、吉野川分水計画が実現して太い用水幹線が大和平野の東西を貫流し、ポンプ揚水によって丘陵地帯でも水不足を感じないというのである。不勉強とはいえ、このことはわたしにとって大きい驚きであった。

地形上河川の少い大和平野では古来大小無数の溜池が造成されたのであるが、それをもってしても用水不足はおおうべくもなく、大正13年(1924)の大旱魃以来、白川溜池(1932)、斑鳩溜池(1947)、倉橋溜池(1955)など大型の溜池が築造された。しかし大和平野の用水問題を恒久的

に解決するには結局吉野川水系の導水に俟たねばならなかった。そこで奈良県当局が利害関係のある和歌山県との調整を経て十津川・紀の川総合開発事業を計画し、20年余の歳月と巨額な投資によって吉野川分水事業が完成されたのであった²⁾。この開発事業によって共同施設としての大迫ダムや津風呂^{つ風呂}ダムの造成をみたのであるが、津風呂ダム造成のため、吉野郡竜門村大字津風呂集落とその周辺地区の一部が水没の運命に遭遇したのである。わたしの関心は用水問題より一転して、湖底に沈んだこの人達の運命—古い郷土の喪失と新しい郷土の再建に向けられたのであった³⁾。

本稿の目的は、ダム構築という公共目的のためとはいえ先祖が営々として築いてきた郷土を永遠に失うという衝撃のなかで、辛うじて新しい土地(奈良市)に集団移住し、異なった環境の中でまちづくりに取組んでいる姿を、主として聴書きに拠って叙述しようとするものである。

稿を草するに当たりわたしは、昭和56年夏以降数次にわたりこの移住地を訪ね、元自治会長紙谷正一・森中茂の両氏その他からお話を聴く機会を得た。また56年秋、旧都風呂の集落を吞込んでいる津風呂ダム湖畔に宿泊し、近郷山口地区の上田竜司氏(1903～、郷土史家)、平尾地区の藤門善治氏(1918～、元区長)の両氏から竜門文化や旧津風呂地区の水没前の生活状況等につき貴い示教を受けた。また宿舎に御来訪下さり御協力をいただいた坂口千代子氏(1910～西谷在住)、片岡一雄氏(『津風呂秘話』の筆者)および植平正純氏(吉野町役場課長、住職)など多くの方々に厚く御礼を申上げたい。

第1節 津風呂の風土と生活

津風呂集落をふくむこの附近一帯は中世以降竜門郷といわれ、竜門岳や竜門寺を中心としていわゆる竜門文化の栄えた土地である⁴⁾。藩政期に入ると津風呂は色生・入野・山口・佐々羅・三津・東千股・河原屋などの諸集落とともに、郡山藩領となり寛永2年(1625)、元禄15年(1702)以降は天領として五条代官の支配下におかれた。明治22年(1889)の町村制施行にともない、竜門郷の範囲は上竜門村・中竜門村・竜門村の三行政村に編成替えされ、津風呂は竜門村の一大字となる。さらに昭和31年(1956)には三村とも吉野町に合併された。津風呂集落は吉野川の支流津風呂川の河谷に開けたもので水没当時の戸数51。明治10年前後に作成された町村誌によると⁵⁾、本籍戸数37であり山村としては中位の大きさである。その他当時の村勢についてみると次のごとくである。

山林 111町8反2畝5歩

秣場 31町3反2畝25歩

藪地 5畝7歩 総計 167町4反24歩

△貢租

地 租 金244円35銭8厘

地方税 金33円37銭 総計 277円72銭8厘

△池 1ヶ所

△牛馬 牝牛7頭

△社寺

春日神社・稲荷神社、阿弥陀寺廃址

△産物

米・麦・雑穀・大小豆のほか特産物として

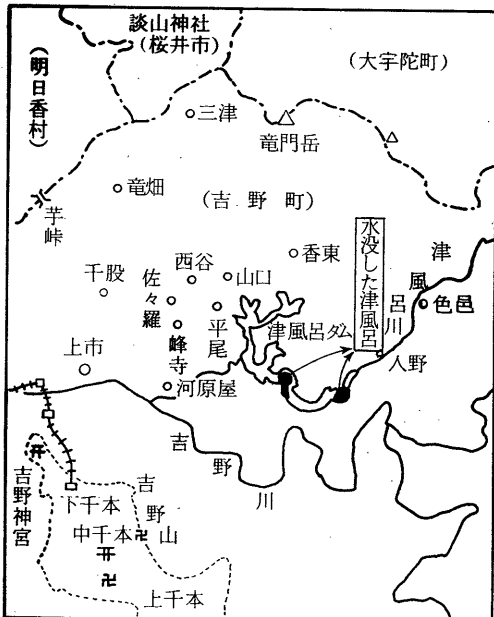
蒟蒻玉 50貫、茶 250斤、楮皮 450貫

△村役人

戸長 紙谷新三郎、用掛 岸本平七

今は湖底に沈んで知る由もないが、この集落は「孤立的な場所で周囲との交渉は少い所であった。併し山林と養蚕でその生活は比較的恵まれていた。山林の多くは松茸山で、その時季になると毎日トラックで業者が買いに来た。津風呂では他地区の10倍位とれた。また大正末期の養蚕景気^{かね}で^{こんやく}銭が入りその頃100円札をはじめて見たという笑い話もある。草葺きの屋根が瓦葺きに代ったのもこの頃である。生活水準も急速に上昇し、祈願祭の折の酒消費量は1斗5升(他郷では1升)に及んだ。小作人は殆んど居なくなり平均50a以上の自作農だったから、竜門村(平均30a)のなかでは、交通不便を別にすれば家並みのそろった暮らし易い場所柄であつた」(上田竜司氏談)。それにしても山村の生活は極めて質素であった。上述の坂口千代子さんは幼少年時代について次のように話す「朝食と夕食はおかゆで昼食だけが麦の入ったご飯。おかずは野菜・山菜が主で魚や肉を食べるのは正月と祭の時だけであった。年中和服、冬は自家製の足袋に猪の皮で作った雪靴をはいた。学校の遠足時には草履、おにぎりを弁当箱に入れて吉野山へ行った。ふだんの生活はこんなに質素だったが交際は非常に^{はで}華美で、娘が3人いたら屋根の棟が吹っ飛ぶといわれた」ものである⁶⁾。

第1図 吉野町津風呂附近



△租地

田 12町4反23歩

畑 10町5反4畝29歩

宅地 1町2反4畝25歩

旧津風呂集落は下・中・宮・東(上)の4カイト(垣内)に分れていた。大部分の家が先住戸で、判明している他からの転入は5戸、ほとんどの家が本家分家の関係にあり、また村内婚が多かったといわれる。2,3男の多くは村内に分家したり養子に行き、娘達も地元や近郷のものと結婚した。なかには地元の良家や大阪へ女中奉公に出る者があったが、京都や信州などへ出稼ぎする例は皆無であった。山村ではあっても貧しくはなかった。交通不便で他から隔離されたこの地に、先祖代々血縁と地縁によって強く結ばれたムラ社会が形成されたものである。そこへ忽然として現われたのがダム建設によるふさとの水没問題であった。

昭和40年(1965)に作成された『津風呂秘話』(片岡一雄稿)に寄せられた序文には「……幾千年の歴史とともに、悲しくも新時代への犠牲

として、紺壁の湖底に深く沈んでいったのである。もぎとるごとく奪われていったただ1つの郷土、祖先の霊も、幾千年春秋をかけて育^{はぐ}くんだ沃土、そして懐しの住家もいまはすっかり湖底にあって永遠の眠りを続けている」と述べられている。津風呂ダム建設対策委員長坂口義雄氏の述懐である。氏はここ津風呂の出身、15才のとき郷土に錦をかざることを唯一の願いとして大阪に出たが、6年間の戦場生活を経験する。幸いにして故国に生還したが、家族を津風呂に残して日夜自ら勤務する会社の再建に努力しているとき、郷土津風呂がダム建設予定地になるという悲運に際会する。郷土の衆望を担ってダム建設対策委員長に選ばれ、当局との難交渉に奔命の苦斗を続けたのである。『津風呂秘話』⁷⁾の筆者片岡一雄氏もまた、津風呂に生れそこで育った愛郷の士である。

第2節 水没と集団移住

津風呂ダム建設の構想は遠く大正14年(1925)にさかのぼる。昭和4年(1929)に計画が具体化され実地調査も行なわれたが、その水没面積は今日完成をみた津風呂ダムの3分の1程度であった。その後これに代って伊奈佐ダム(宇陀川の支流芳野川をせきとめるもの)が計画されたが、これも第2次世界大戦のため中断された。以下戦後の津風呂ダム建設の経緯について記してみよう⁸⁾。

△昭和22(1947) 奈良県職員、津風呂現地視察。

△昭和23(1948) 竜門村長と津風呂地区代表2名が知事・県会議長にダム建設反対陳情(1月23日)、同じく農林大臣・安本長官・建設大臣に反対陳情(2,25)。

△昭和24(1949) 区長が地区民大会を招集、その結果地区代表片岡一郎ほか2名が知事・議長を訪ね、反対決議文を手交(2,13)。津風呂ダム築造反対地区民大会を開催し誓約書に署名(2,23)。……(個人の利害に走ることなくいよいよ結束を固くして、最後まで反対運動を継続する。)

△昭和26(1951) (野村知事退任、奥田知事

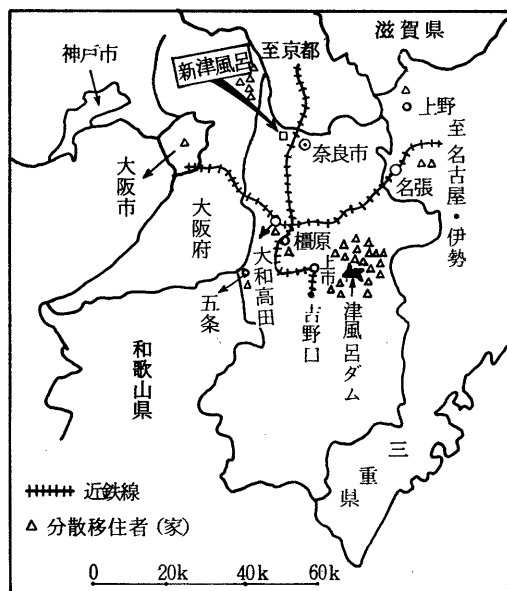
就任)。十津川・紀の川総合開発第3回協議会の結果、その一環としての津風呂ダム築造決定(10,20)。

△昭和27(1952) 知事ら来村し地区総会開催(2,27~8)、十分な被害補償を国と県に要求することに決し全員署名捺印す。また竜門村としてダム対策委員会を結成(会長片岡一郎)、県宛に要望書を提出(3,1)⁹⁾。次いで津風呂ダム工事始まる(5,27)。

「十分な補償をする」という相互諒解のもとこの年の5月9日、県当局は2,3の集団移住候補地を地元提示したが、それは地元にとって到底満足できるものではなかったようである。好適な代替地の提示がおくれている間に、一致した集団行動を約していた津風呂住民の間にも、いわば分散移住派と集団移住派という二つの流れがでてきた。すなわち、親戚や知人を頼って適当な既耕地が得られたり、農業外就労の見込みがついた人たちは、早期に補償金交渉の妥結をみて分散もやむを得ないと考え、先祖の遺志を生かして新天地に新しい郷土津風呂を建設し共同体の存続を願う人たちはあくまでも集団移住を望むわけである。この対立が決定的

になったのは11月16日の夜開かれた地区大会の票決で、分散移住（早期補償交渉希望）26票に対し、集団移住（慎重に補償交渉を希望）25票という際どい結果がでたことで関係者の苦悩が推察される¹⁰⁾。

第2図 分散移住者の分布



その後種々の迂余曲折があったが、分散希望者はそれぞれの縁故を求めて各地に分散した。

集団移住派のなかにも若干の離脱者があり、分散移住者は結局31戸（60%）にのぼった。27年4月に開始された補償交渉も30年11月には妥結し、奈良市内への集団移住は33～4年にかけてほぼ完了した。他方、ダム工事も36年(1961)4月に竣工した。津風呂の人びとにとっては故郷との永遠の訣別である。ダムの堰堤に建てられた慰霊碑除幕式(38, 6, 3)のあと、分散派も集団派もともに津風呂湖上を一巡し湖底に沈む故郷に、そこに眠る祖先の霊に花束を投じてその冥福と郷土の再建を祈った。いま観光地津風呂の音頭はつぎのように唄う。

- 1 ハアー津風呂よいとこ楽しいところ
花の吉野と花の吉野とさしむかい
妹山背山のみどりの森が
かわい姿で招いているよ
- 2, 3 (罫)
- 4 ハアー
津風呂よいとこ楽しいところ
大和国原大和国原お米の里に
そそぐこの水この滝しぶき
その名はゆかし津風呂の湖よ

大和盆地に用水を送る喜びが端的に唄われており、その犠牲が尊く報いられたことへの感懐が深い。

第3節 水没にゆれ動いた村むら

戦後におけるわが国有数の開発事業といわれた佐久間ダムは、昭和28年(1953)の着工以来5千人近くの（死亡87, 重傷1,993, 軽傷2,814）犠牲をはらい、139万坪（うち家屋248戸）の水没をもたらした。これに対する補償問題は難航を極めたが、富山村（愛知県北設楽郡, 141世帯）と当局との妥結を突破口として急速な進展を見せ、富山農民は豊橋市郊外の高司天^{たかしてんぼく}泊の新開拓用地に移転したのであった。1戸平均4～50万円, 最高100万円の補償であったというが「金のお城を与えられてもイヤだ」という気持は、湖底に沈んだ郷土を持つ人びとには共通の実感であったと思われる。「先祖代々この山峡に住みつき生きてきた人びと、決して豊かではないが平和な日々を送ってきた人びと。美しい

景色と澄んだ空気に恵まれて安らかに生きてきた人びと。一木一草にもなじみがある。田や畑には汗がにじみ込んでいる。豊かに伸びた山林は、お祖父さんが植えて丹念に世話してきたものにちがいない。代々の墓はこけ蒸している。そこは彼らの心のよりどころであり、生活の城塞だ故郷なのだ……」¹¹⁾。

より小さいダムの構築にいたってはその例が多いが、滋賀県の愛知川^{えちがわ}ダム（農林省施工）もその1例である。それは愛知川の上流永源寺町の九居瀬（農家戸数70, 佐目（同46）, 菅尾（同24）の3部落に及ぶ地域を水没しようとするものであった。その経営耕地面積はそれぞれ1戸当り18a, 28a, 15aの零細なものであるが、山村のこととて広大な私有林（九居瀬で210ha, 3

部落中で最も広い)、公有林(佐目で360ha、3部落中断然広い)を有し、農業の零細性を補って生活してきた。そんな悪条件の下にあっても郷土を死守しようとするのは住民の当然の願望であり、31年度(1956)発足の愛知川ダム審議会が翌年2月水没補償基準を示すまでは、工事は遅々として進まなかった。その直後町議会が愛知川総合開発、江勢道路(滋賀県八日市市～三重県四日市市)、観光事業の促進を三大事業として掲げるに及んで、達識ある佐目地区の某氏が各戸に配布した次の声明文が大きい反響を呼んで、事態が動き始めたという。

「先祖が築いたふるさと佐目を愛知川ダムで水底に沈めることにはいきどほりを感じるが(中略)、この際自利自慾をすて先祖が汗と油で築いた佐目地区をどうして存続させるかを考える必要がある。最後まで反対すれば佐目住民は各地に離散し、佐目地区は永遠に消える。そこで全地区住民が集団移住して佐目の名を永久に残そう」¹²⁾。

この報告書は、部落祭祀集団としての宮座組織が、^{あた}山(共有林の使用権)制度を媒介として村びと結束の紐帯とされてきたが、ダム建設という外的インパクトによって、もはや部落の統合機能を果し得なくなったこと、それだけに集団移転後の神社・寺院の在り方や新しいコミュニティ建設の問題にも困難な一面のあること、を論じたものである。

水没集落は、水没によって二度と地上に再現することは不可能である。またその集落の住民にとっては、先祖が長い間営々として築いてきた郷土、自らが生れ、育ち、苦楽を共にし、数々の思い出をもつ郷土を何らかの形で後世に遺したいと希うのは当然である。ましてこれらの集落の多くは交通不便な山峽に立地し、先祖

伝来の風習や生活文化を濃厚に遺しているところが多い。文化財保護の立場から地元の自治体や研究者においても、水没地区の民俗についての緊急調査を行なった事例が多数にのぼっている。研究者によるその1例として、桜井徳太郎の『日本人の生と死』(1968、岩崎美術社)がある。それは東京都西多摩郡奥多摩町、もと小河内村といわれた水没山村における人生儀礼等の記録である¹³⁾。その他、兵庫県民俗調査報告の1つである『上生野一生野ダム水没地区民俗資料緊急調査報告書一』(1969)、佐賀県郷土研究会編『佐賀県北山ダム水没村落調査報告』(1954)など多数にのぼる。日本文科学会編『佐久間ダム』『ダム建設の社会的影響』(1958、1959、東大出版会)は余りにも有名である。

上生野は戸数69、うち22戸は耕地を持たず、非農家の過半は林業労働に従事していた。かつて生野銀山の栄えた頃は、そこで用いられた良質木炭の生産地として早くから貨幣経済に入込んだのであったが¹⁴⁾、銀山の衰退とともに山村の人びとの生活は荒廃した(このことは石見の大森銀山、佐渡鉱山、近くは北海道や九州の産炭地についてもいえることである)。上生野の人たちは僅かの耕地に米(1戸当555k)、麦(同39k)野菜・ミツマタ・大麻等を栽培し、景気変動にさらされる養蚕・養畜、それに瓦製造をしながら辛うじて生活してきたものである。ただ、但馬地方にみられた親方百姓(大地主)対子方百姓(隸農)のごとき封建的隸属関係はなく、広い部落有林の共同体的利用と相俟って、比較的階層差の少いフラットな社会生活を営んできた、といわれる。この点、本稿の調査対象地―津風呂集落と相似ているが、生活水準においては上生野の方がより低いと想像されるのである。

第4節 新津風呂のまちづくり

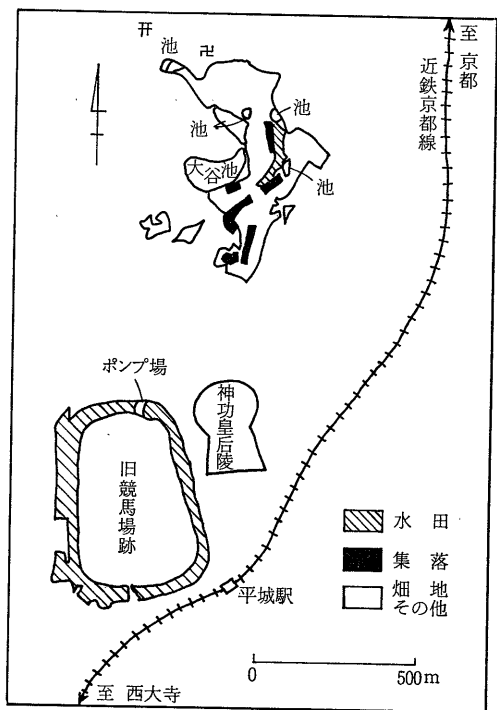
I 新津風呂への移住

補償交渉進行中の昭和28年(1953)1月、集団移住を希望する者31名によって「新津風呂建設組合」が結成されたが、その後種々の理由で11

名が離脱して各地に分散移住を行なった(第2図)。移住地決定の遅れたことが主な理由であった。これらの人びとは日時の遷延とともに不安焦燥の念にかられ、分散やむなしとして単独交渉に踏切り、翌2月補償交渉に調印した。他

方、残された20戸の集団移住派は3月、適当な代替地の未決定のまま補償交渉に入り、奈良県・農林省当局との仮調印に踏切らざるを得なくなる。と同時に当局もまた最適の代替地の決定を急ぎ、奈良市山陵町の地内に約10ha、秋篠競馬場跡に6haの土地提供の申出で行なった。それはほぼ移住民の要望に近いものであったので急転直下決定をみて明かるい見通しが出てきた。かくして昭和33年(1958)までに現地に20戸分の宅地、競馬場跡の外周部に6haの田地が造成され、さらに地元山陵町のN氏(上述の移転地提供も同氏の斡旋による)の尽力により地内の耕地・山林など10ha弱の購入契約も成立した。次いでまちづくりのための灌漑用水ボーリング、水路・農道をはじめ電気・水道・道路その他の諸事業も軌道に乗って、移住者の受入れ体制が整備された。そこで山陵町に60m²の事務所を建設し(新津風呂建設組合長森中宇三郎氏)、そこを共同宿泊所として逐次家屋の建設が行われた。33~34年にかけてほとんどの家が吉野からの移転を完了したのである。

第3図 新津風呂町の位置



多くの分散者があったとはいえ、集団移住の20戸が交通至便な奈良市内で先祖以来の家業た

る農業を継続できる条件(田畑・用水・山林原野)を与えられたことは何よりも幸いであった。しかし何分にも吉野の山村から都市近郊の新興団地附近への移住であるから、日常生活にも始めからいくつかの障害があった。先ず水であった。3日経って奈良上水道の水が届いたが、その薬の臭いには一同辟易したという。吉野の郷土には家の前の水路に清流があり、そこで下着を洗い足をすすぎ、主婦はそこで洗たくもした……その状況が懷しまれるのであった。薪がなくて風呂がわかせない。もらい風呂を経験して感激した人も多かったという。また山村とはいえ吉野では毎日魚売りのおばさんが来たが、ここではショッピングのため西大寺の街や平城ニュータウン(集落の北方700m)まで出かけねばならない。田んぼまでの距離は800mもある。慣れるまでには随分苦労があったようである。

移住にあたっては1戸当り宅地150坪、水田20a、畑40aをそれぞれ基準として配分され、希望によって増減が認められた¹⁵⁾。昭和40年(1965)の調査によると、地区全体の水田面積4.19ha、畑面積1.37ha、樹園地2.1ha、計7.66haの耕地を有し、水稻17.03トンの収穫があるほか、畑にはさつまいも・大根・すいかなどが、樹園地には桃が栽培されていた。また養鶏に重点がおかれ(500~800羽飼育者4戸)鶏卵も出荷されたという。当初は近郊の立地を生かしての営農が期待されたが、その後次第に若い人たちが他産業へ志向するようになり、現在では1戸を除きすべてが第2種兼業農家となっている¹⁶⁾。筆者が昭和60年(1985)再度ここを訪れたところには樹園地に桃を作っている農家は2~3戸しかなく、養鶏家も2戸に減少していた。最近10年間に附近への移住者も漸増し現在では、津風呂からの移住者19戸(2戸は転出)をふくめて55戸(外人1をふくむ)、当初の3倍近くに増加している。すなわち水没によってここへ移住した家々(基本的には農家)が、内部的には世代交替によって第2種兼業農家へと変貌しながら、同時に大都市その他からの移住者が加わって、急速にムラ社会からマチ社会へと推移しつつある現状である。

第1表 新津風呂町および附近の世帯（人口）増加状況

町 名	年 時	S. 3 8	S. 4 4	S. 5 0	S. 5 6	S. 6 2	62/38世帯増 %	〃人口増 %
津 風 呂		20(105)	28(111)	36(138)	50(195)	55(188)	275	179
山 陵		169(768)	342(1,226)	571(1,948)	655(2,122)	843(2,658)	499	346
押 熊		149(699)	161(725)	214(909)	353(1,271)	493(1,776)	331	254

(注) 各年3月末常住世帯および人口。

II 新しい郷土の建設へ

先祖伝来の郷土が水没の運命に陥ったとき、これに代わる新郷土の建設は津風呂住民の悲願であった。長い補償交渉の過程で多くの脱落者はあったが、最後まで一致団結して集団移住を希望した人びとが先ず考えたのは、新しい郷土建設の象徴ともいふべき氏神（春日神社）の遷座と、阿弥陀寺（浄土宗）の移転および墓地の新設であった¹⁷⁾。

① 氏神の遷座

昭和36年4月30日春日神社遷座式典が新津風呂町で行われた。これに先だち旧津風呂の御神体を屋形に納めトラックに安置して某夜、警察の保護下桜井町を経てこの地に運び、最も高い丘を社地に選んで神移しの儀を行なったという。当時の氏子惣代は中谷俊一・紙谷正一および鶴谷新太郎、自治会長は森中宇三郎であった。今その境内に立つと中谷家の最古の献燈（嘉永6年＝1853）をはじめ、この地に移住後のとし祝い（還暦・米寿）の際の献燈も数基見られ、境内の清浄さとともに氏子の崇敬の篤さを偲ぶことができる（62.3.22筆者参拝）。氏神の遷座とともに頭屋制（村座）も継承されている。毎年10月1日氏子一同参拝してくじ引きで2人の頭屋を選出したあと、新旧頭屋の引継ぎが行われる（頭屋手当が支給される）。正月元日の宮参り、2月1日のとし祝い（42才、61才、77才、88才）には氏子一同参加して酒食を共にし、夏祭（7月10日）、秋祭（10月10日）には餅まきが行われ、また4月29日の移住記念日には頭屋が餅をついて配布する。頭屋のお勤めも忙しいが、このような年中行事を通じて津風呂の人びとは吉野を思い先祖を偲ぶのである。それはまた新しいむらづくりへの精神的紐帯でもあ

る。あとから町内に移住した数10戸の人たちも神社の清掃に参加したり夏・秋の祭典に参加して、むらづくりの輪が漸次拡大しつつある。

② 村寺と墓地の移転

他方、寺院については旧津風呂の薬師堂の建物をそのままこの地に移して、阿弥陀寺（浄土宗）とし薬師を合祀した。移住前には浄土宗のほか真宗（10戸）、天理教（2戸）の家もあったが、ここへ移住した家々（うち真宗5、天理教1）はすべて阿弥陀寺の檀家となり、同寺は村寺の形となっている。葬儀のときは吉野の西蓮寺やその末寺たる福善寺の住職が導師を勤めるが、平素はK女が寺守をつとめている。旧津風呂には上・下2ヶ所の共同墓地があったが、ここへ移住した上墓地関係者7戸と水没した下墓地関係者10戸の墓は、その石塔をそのままここに運んで新しい共同墓地を阿弥陀寺の隣地に造成した。旧津風呂では両墓制が残っていた¹⁸⁾。ずっと以前は全戸、次いで垣内ごとに葬式が営まれ、ムラ人とともに葬家を出た輿（遺体）は迎え地藏の前で読経を受けて土葬された。そこをハカバまたはオハカと呼んだが、やがて各家では石碑を建てて参詣する。そこをダントバと言ったが新しい津風呂ではこの風習は当然なくなり、現在、郷土にあった迎え地藏が、この新共同墓地の入口に移されている。各家の墓域は公平にクジ引きできめられた由であるが、その墓碑には〇〇院〇〇居士・大姉、〇〇禅定門・禅定尼、〇〇信士・信女という階層を示す銘が刻まれており、神社への献燈と同じようにかつての家格がうかがえる。

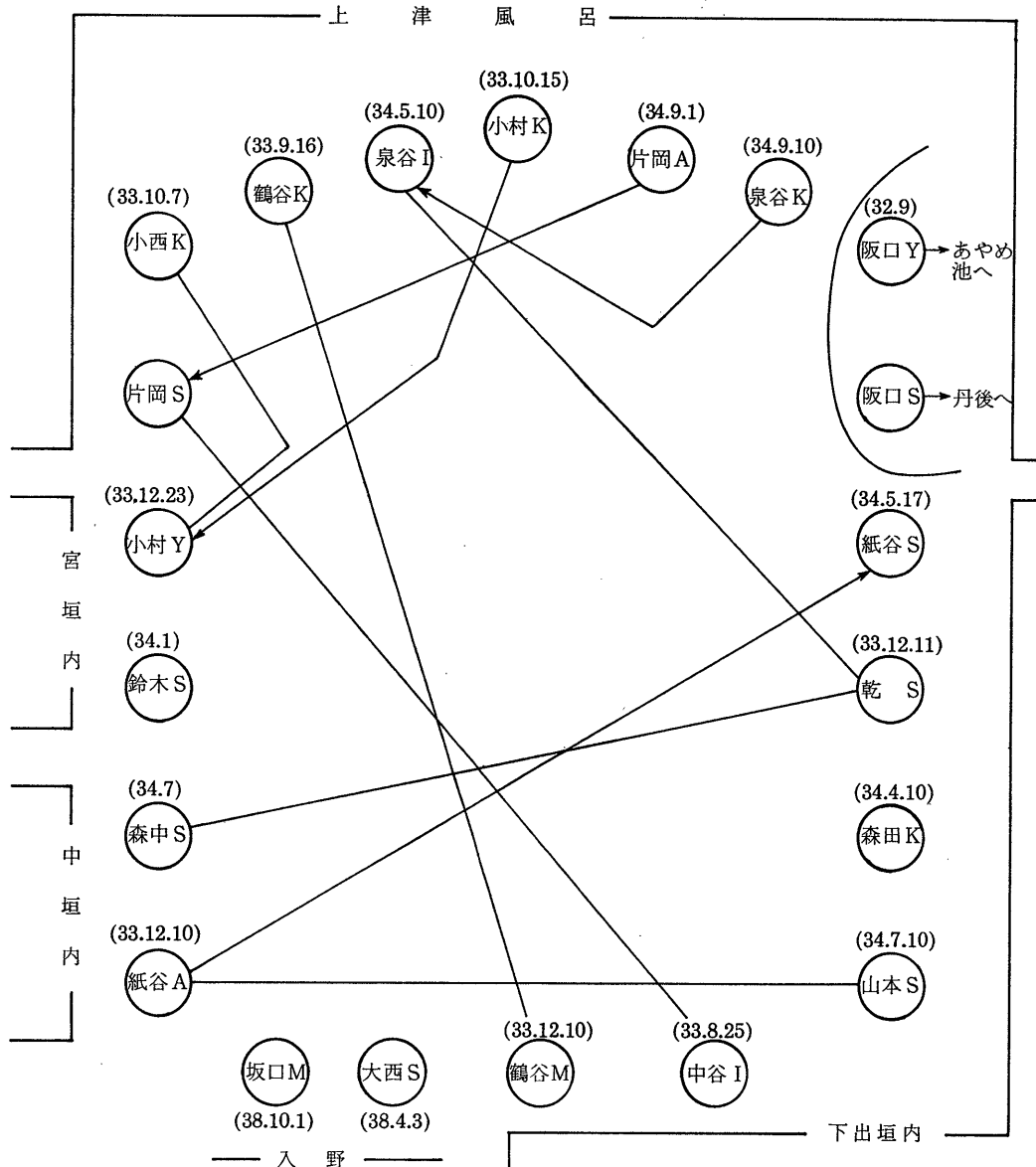
③ ムラ組と自治会

津風呂からの移住者17戸（19戸のうち、入野出身など2戸を除く）と、移住の際関係があり現在奈良市内に居住するS姓2戸を合せて19戸

は、開拓移住終了後の財産管理（土地・山林など）のため「津風呂建設組合」を組織している。この地域は古都平城京跡に近く「歴史的風土平城宮跡特別保存地区」に指定されているので、建築物や工作物の増改築に対し種々の規制を受ける。そのような景観上の街区形成をふくめ、新しい津風呂の「ムラづくり」、「マチづくり」よりもこの方がしっくりすると、このひ

とという）の中心となる推進グループは、この建設組合の人びと（一種のムラ組）—とくに現住の17戸である。この17戸に新移住者（40年代以降始まり62年現在38戸）を加えて自治会が結成されている。新移住戸は1地区に集団しているもの、分散しているものなど区々であるが、現在は自治会が4班に編成されている。たとえばA班14戸は津風呂移住5戸（氏子）と新移住

第4図 新津風呂町における家の相互関係



- (注) ① 外側の太わくは、旧津風呂に居住していた垣内名である。(入野からの入村2戸)
 ② 線中太いものは本家・分家関係、細線は本分不明と親族関係を示す。
 ③ 頭部に記す年月日は、棟上げの日である。

9戸（非氏子）とから成っている。移住の新旧を区別しないこの班構成は極めて有意義である。冠婚葬祭、とくに葬式組として機能し班長（および自治会長）は他班の葬儀にも参列する。また氏子・非氏子を問わず神社の清掃に協力し祭典にも参加する。ここにはムラの生活原理がある程度生かされている。

④ 生活様式の変化—山村民から都市民へ

郷土を同じくする津風呂出身の家々の親族関係をみると（第4図）、本・分家関係が4、その他の親族関係が5である。これらの血縁のネットワークに同郷という地縁関係が重なって強固な連帯を維持し、それが移住地における新しいムラづくりの源泉になっていると思われる。しかしそれは郷土津風呂のムラの性格の温存や再現ではなく、上記の自治会の班編成にみられるように、都市人との接触による交際関係のひろがり求めようとするものである。津風呂町の生活はこの意味で、純然たる団地社会のいわゆる「砂漠」のなかの生活、とは異質的である。

ただ、津風呂住民の移住（昭和33～4年）とその後の新住民移住との間には10年のインターバルしかなく、両者の戸数比は現在17：28であり、後者は年毎に増加の姿勢であるから、旧津風呂再建（17戸）の意味でのムラづくりはほぼ終ったとしても、それを核とする津風呂町のムラづくり（あるいはマチづくり）は今後大きい試練の前に立たされている。因みに古い歴史をもつ隣接の押熊町では新旧住民（62年現在331戸、第1表参照）が力を合わせ、地区を挙げての文化活動発表会を本年3月に開催した。それまで新旧住民間の交流はほとんどなかったが、

この地区で所有していたため池を売って新しい公民館（鉄筋2階、経費2億4千万円）を完成したのを契機に、旧住民が積極的に呼びかけて実現したものである。もとより移住したばかりの旧津風呂住民にはまだそのようなエネルギーの蓄積はなく、住民集会のための公民館さえもっていない。移住に際して急造された集会場が辛うじてその機能を果している程度である。焦眉の課題は次の3つである。

① 公民館の設置

移住の際に急造された集会場は旧倉庫であり20戸の集会が限界である。まちづくりを目指して集会をもつ場所がなく、現状では町民の懇親を図ることもできない。積立金を始めようという意見もあるが困難な問題である。

② 水洗便所の実現

都市近郊地として当然であるが、そのための道路拡幅のおくれ、そして立地点が丘陵地であること等が実現を遅らせているようだ。非農家がふえればこれは一層深刻な問題となる。

③ 氏神春日神社の本殿の新築

旧津風呂の古い本殿をここへ移したが、すでに20年を経過し老朽化している。新しいまちづくりのシンボルであるだけにその新築が急がれるわけである。

いずれもむづかしい問題であるが、希望と夢はある。近い将来4万坪のキャンパスをもつ某大学が近くに新設され、そこへの通学道路数本の開設とバスの運行が実現すれば、水洗便所の実現、ショッピングの便宜その他、地区の発展が期待されるからである。

お わ り に

この稿を草した直後、朝日新聞(61.11.18)は「ダムに沈む村」の見出しで、岐阜県揖斐郡徳山村におけるダム建設状況の特輯していた。この村は揖斐川最上流の寒村、最盛時約540戸あった家が現在40戸、地方自治法に基づき62年4月には廃村になるという。徳山ダムが完成すれば日本最大の貯水量を誇る一洪水調節、都市用水の供給、発電など多目的。たん水面積1,300

ha、村の面積の5%に過ぎないが標高400m以上の山林と1集落を残して7集落全部が水没する。ダムの完成は10年後だが村を離れた人たちの約8割は岐阜市郊外4ヶ所の集団移転地で新生活をスタートさせている。なかには「徳山御殿」と周辺住民から嫌味をいわれるケースもある由。そんな豪華な住居にいても都市型住民とはなかなかなじめない。

これに比べると、津風呂町における先住者である津風呂移住民の立場は、より主体的であり先導的である。自治会長は歴代津風呂17戸のなかから選出され、氏神祭祀の頭屋も伝統的にそこから選ばれる。ただ吉野母村の農村的郷土は一応ここに再建し得たのであるが、その周辺地における急激な都市民の流入、巨大団地の造成などによる都市化の波は、山村にオリジンをもつ津風呂移住民の生活様式を変貌せしめずにはおかない。現に移住当時の世帯主の多くは世を去り、移住第2世代はほとんど農外就業者である。オール2兼農家の現状はつぎの世代でどう変わっていくのであろうか。移住世代＝父→子→孫3世代の家族や家族員個々のライフコースは、今日の歴史的・社会的変動のはげしさの中でどのような変貌をとげて行くのか¹⁹⁾、またこの津風呂移住民のまちづくりにおける主体性と先導性が、都市化の著しい近郊社会の中でどこまで確保され得るのか、今後の大きい関心事といわざるを得ない。

〔注〕

- 1) 末永雅雄稿「大和の古墳・池・条理」(奈良地理学会編『奈良文化論叢』1967、堀井先生退官記念会刊、所収)において末永博士も同じような景観について述べていられる。
- 2) 詳細は奈良県編『吉野川分水史』(1977) 参照。
- 3) 吉野地方のダム開発と水没集落に関しては堀井甚一郎稿『紀伊山地～奥吉野地方の地理的変容』(前掲『奈良文化論叢』所収、p.1119～54) 参照、ここでは主として十津川水系を取扱っている。その他本稿で参照したものは次の通りである。
- ④ 日本文科学会編『佐久間ダム』(1958、東大出版会)
- ⑤ 〃 編『ダム建設の社会的影響』(1959、〃)
- ⑥ 小林謙一著『ダム建設にともなう農業問題』(近藤康男古稀記念論文集『現代日本農業の諸局面』1970、御茶の水書房所収)
- 水没地関係については
- ⑦ 野口隆「樽床部落の共同体的性格とその解体」(広島県教委編『三段峡と八幡高原』1960、所収)
- ⑧ 花島政三郎「水没による部落の解体・再編成と宮座一滋賀県神崎郡永源寺愛知川ダム建設の場合一」(国学院大学『日本文化研究紀要』20号、1967、所収)

⑨ 桜井徳太郎「水没山村の人生儀礼」(同氏著『日本人の生と死』1968、岩崎美術社、所収)

⑩ 柴田実・和田邦平「上生野」(兵庫県教委編『生野ダム水没地区民俗資料緊急調査報告』1969) 所収

4) 「竜門文化」については上田竜司著『竜門の歴史』(竜門文化保存会『郷土史料』11号、1982)、上田著『よしの竜門の古刹一蒼生寺』(同、1984)、上田稿『竜門騒動』(未刊)がある。

5) 川井景一著『大和国町村誌集』巻15、1891、発行。(著作者川井は東京府平民、奈良県奈良町大字西城戸に寄留し、妻希世子とともに書籍商を営んだと思われる。なお発行者は中尾藤三郎・喜多重蔵・中井文次郎の3人で、いずれも添上郡治道村大字白土在住となっている)

6) これらの生活事情は戦前の山村では一般的であったと思われる、津風呂の隣の平尾地区には明治41年(1908)制定の「積善同盟会」の規約が保存され、現在もそれが守られているという。

△積善同盟会々則(原文)

第1条(略)

第2条 初老、還暦等ノ祝賀ニ際シテハ自宅ニ於テ一切酒食ヲ嚮セズ、陰暦1月14日初集会ノ席上各分ニ応シ其節約ヨリ生レタル利金ヨリ幾分ヲ区内ニ寄附シ、神酒トシテ老升乃至老斗ノ範圍ニ於テ区民ヲ嚮シ余リアレバ神社仏閣ノ改築修繕ノ費用及ビ区内ノ貧民救助ニ当ツルコト

第3条 第2条ニ掲ケタル貧民トハ放蕩其他不良ノ行為ヨリ失敗シタル貧民ニハ及サズ、病傷孤独親族ノ依辺ナキ者ニ適用ス

第4.5.6条(略)

附 則

1 葬式ニ際シテハ区内1戸ニ宅人ハ必ず墓地マデ見送ルコト

1 区中総齊ヲ廢シ葬式ノ当夜村廻夜ヲ営ミ粗飯ハ嚮スルコト

1 手伝ハ(葬式)本膳ヲ廢シ応分ノ粗飯ニ止ムルコト

1 葬式手伝ハ1垣内若シクハ2垣内以内ニ限ルコト

1 諸興行ハ向後10ケ年間区民一同ニ停止スルコト、若シ之レニ反シ強イテ興行ヲ成サントスル者ニハ地所及ビ諸器物ノ貸与ヲ成サザルコト

1 他区ヨリ興行ノ祝儀ハ一切謝絶スルコト

(注) 興行(ホツカイと読む)とは地区同志の附合いを意味し、この地方では家を建てたり葬祭婚

礼の節、親族友人などが祝意を表わすため容器に米（1斗，5升…）を入れて持運んだ。その容器を行器（ホツカイ）と呼んだ（上田竜司氏の示教に拠る）。

- 7) 『津風呂祕話』（ガリバン刷の大冊であるが未刊）は第三者による報告書ではなく、水没地区の住民である片岡一雄氏が心血を注いで執筆したものである。それは故郷の水没によるダム建設という外圧に対応してきた、地区住民のいわば苦悶の自叙伝ともいべきものであり、コピーして各戸に1冊宛保存されている由である。
- 8) 『吉野川分水史』および『津風呂祕話』に拠る。
- 9) 「ダム建設によって奈良県平野部の旱害が救われ、民心の安定と経済的安定が保証されるのであるが、その裏で地元竜門村と大字津風呂は大きい犠牲となるのである。よって将来受益地が得るところの生活水準に等しい生活水準と行政施策を得るに足る補償を要求する」というものである。
- 10) 「分散移住派23戸，集団移住派28戸」（『吉野川分水史』p. 507）という数字もあり，「集団移住代替地希望者33戸」（『祕話』）という数字もある。多少のフレがあったと推定される。
- 11) 長谷部成美著『佐久間ダム—その歴史的考察』（1956，東洋書籍）p. 34。
- 12) 花島政三郎前掲稿，p. 218。
- 13) この記録は『東京都文化財調査報告』（1953，補訂1963）にふくまれている。
- 14) 『上生野』京都大学教授柴田実氏の序文。
- 15) 宅地や耕地をどうして配分決定したか，というこ

とは興味ある問題である。K氏（元区長）によると，「宅地に好適なもの19ヶ所（当初より1戸減ったと思われる…筆者）をつくり，（うち150～160坪で広いもの13，少し狭いもの6）両者を希望によって2組に分け，抽せん順位によって逐次決定，菜園畑は宅地に近いものを選んだ。石垣造成を必要とする宅地へは別途に50万円を配付した」とのことである。

- 16) 吉野の郷里とは異り，京阪・奈良への交通が至便になったので，世代の交替とともに，企業や公務員勤務が増え，老人層のみが長い間の経験を生かして農業に従事している現状である。
- 17) まち造りやむら造りの象徴として氏神をもつか否かは，時代や住民によって異なるようである。西奈良でも戦前にまちの形態を整えたあやめ池町では氏神を勧請しそこへの転入者は自動的にその氏子または奉讃者となっているが，戦後に発達した登美ヶ丘町一帯には氏神が存在しない（かつて勧請の動きもあったが実現していない）。近江の大中の湖干拓地には3村とも氏神が勧請されている。
- 18) 当地方の両墓制については，中田太造「大和の墓制」（上掲『奈良文化論叢』所収）において，「大和高原から宇陀山地・竜門山地・吉野川流域にかけて……」両墓制の行われていることが指摘されている（p. 1020）。
- 19) ライフコースの考察については森岡清美・青井和夫編『現代日本人のライフコース』（1987，日本学術振興会刊）序章（森岡稿），終章（青井稿）など参照。